



## 「する」「みる」「ささえる」の関係論

横浜国立大学 教育人間科学部  
教授 海老原 修

### C-1 「する」「みる」「ささえる」の関係論

1961年議員立法・スポーツ振興法第4条「計画の策定」は40年後の2000年にスポーツ振興基本計画として履行されたが、これを見越して1998年スポーツ振興投票の実施等に関する法律（スポーツ振興くじ (toto)）が成立している。両者はその後に続く2006年BIG導入による財源確保、同年9月中央教育審議会スポーツ・青少年分科会の意見を踏まえた改定、2010年8月スポーツ振興法の見直し案・スポーツ基本計画制定に向けたスポーツ立国戦略と矢継ぎ早に進行する計画の契機となる。スポーツ立国戦略では、新たなスポーツ文化の確立・醸成を目指し、する人、観る人、支える人と、3連呼する人の重視を主眼に、向こう10年間に実施すべき重点戦略（施策・体制整備）と政策目標のあり方が具体的に明示され、アクセルが一気に踏み込まれ、2011年スポーツ基本法、2012年スポーツ基本計画を経て、2015年10月文部科学省外局・スポーツ庁設置へと進む。

着目すべき視点は、2000年スポーツ振興基本計画から2010年スポーツ立国戦略の間に、生涯スポーツ社会実現に向けて、する、観る、支えると重視される人のありさまである。この3者にはそれぞれの理念があるのか否か、あるいは3者がなんらかの関係の下で、ある種の理念が目指されているのか。それがとりもなおさず、①新しい公共のもとで、②新たなスポーツ文化の確立を目指して、③さまざまな形態で、④積極的にスポーツに参画する環境を実現する、というスポーツ権の履行を目指すならば、する権利、観る権利、支える権利と分別してしかるべきであるが、3者が並列される意味合いの含意を論究するには、この3者の単純な関係が手始めとなるかもしれない。

それでは、この3者はどのような関係にあるのだろうか。

直前に公表された内閣府「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」(2015年)では成人の運動・スポーツ実施状況が明らかにされ、内閣府(旧総理府)「体力・スポーツに関する世論調査」(1972年~2009年)と文部科学省「体力・スポーツに関する世論調査」(2013年)をつなげれば、40数年にわたる成人の運動・スポーツ実施状況を把握できる。また、1964年に始まる文部科学省「体力・運動能力調査」では1977年より児童生徒の運動実施状況を4段階で評価しており、体力・運動能力の向上や低下に直接的に影響する因果関係を特定できる資料を提供している。

しかしながら、この「する」人々のうち、どれくらいの人々が「観る」人であり、「支える」人となっているのだろうか。もとよりスポーツ立国戦略が掲げる3者の相互関係はどのような関係を想定していたのであろうか、積極的な論議は数少ない。たとえば、ボクシングの女性記者や歌舞伎の女性批評家を想定すれば、「する」人と「みる」人は一致しないばかりか、彼女らの「みる」は順次、見る→観る→視ると変換され、批判・批評する視点を備える。それはより高度な専門性を有すると期待されるとともに、漢字が意図する限定的な定義を退けて、ひらがなによる「する」「みる」「ささえる」が多義性を保証するという点でさまざまな論議を呼び込む可能性を確保できる。そのような試論をまさにささえるのは草野進によるプロ野球批評であり、3者が原初的には独立した行為であると位置づけられる。そのスタンスを堅持する一方で、より論議を深める手始めとなる資料を提供するべく、本論ではこの3者の関係に着目した。

## C-2 「する」「みる」「ささえる」の実情

この3つのスポーツ参加形態は理想的にも原初的にも、その独立性が保障されると期待されるが、実態としては密接な関係にある。

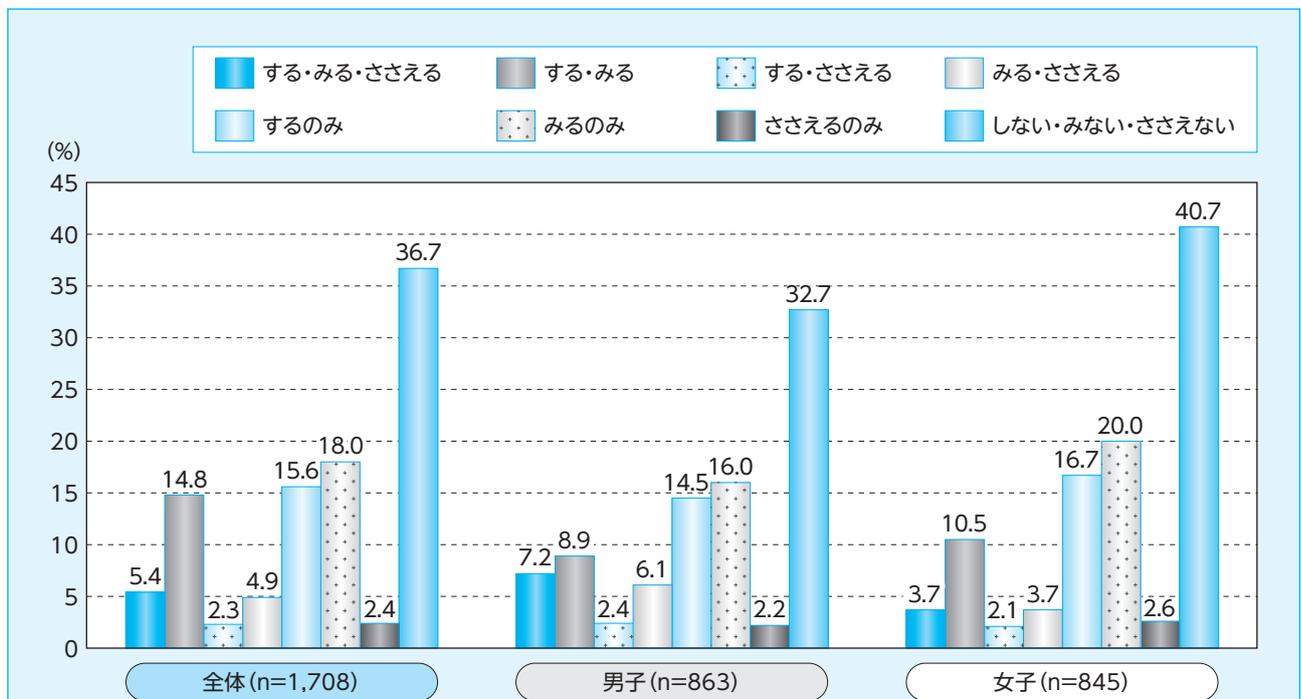
他人とのかかわりなしに一人で行うウォーキングやジョギングであってもその身支度には有形無形の人々に支えられている。ウェアやシューズはもちろん土であろうが芝生であろうがコンクリートであろうが道路やグラウンドの恩恵を受ける。シューズに支えられていない感覚はオーダーメイドのそれを想定すれば解消できよう。背筋を伸ばして颯爽と闊歩したり疾走したりする自らの姿を街中のウィンドウで確認しない者はいないように、潜在的に周囲から注がれる視線を意識しないはずはない。

スタジアムやアリーナでスポーツをみる人もまたその競技の本質的な面白さを知っていようがいまいが、無意識のうちにそれに接近している。競技者の心性に図らずも感情移入する自分自身を振り返る事例は多々ある。その

ようなスポーツシーンが多くの裏方の人々に、そしてゲームを進行する人々にささえられている、としばしば立ち止まって感じ入るチャンスもある。

ささえる人々、すなわちスポーツボランティアもまた堂々と胸を張って、する人とみる人の前に厳然と、しかしながら威張らずに、それでも誇らしげに立ってほしい。すなわち、いかなる形態の参加にしてもおのずと残りの2者にささえられていると理解するならば、三位一体のスポーツ参加がすでに出来ている。

図C-1は10代の青少年にみるスポーツ参加パターンを示した。「する」とは週3回以上の運動・スポーツ実施頻度を、「みる」とは年1回以上のスタジアムやアリーナなどでのスポーツ観戦、「ささえる」とは年1回以上のスポーツボランティア実施をそれぞれ基準とした。左図に示すように、この3つの基準をクリアする10代の青少年は5.4%、「する」「みる」は14.8%、「する」「ささえる」は2.3%、「みる」「ささえる」は4.9%、「するのみ」は15.6%、「みるのみ」は18.0%、「ささえるのみ」は2.4%、「する」「ささえる」は36.7%、「する」「みる」は7.2%、「みる」「ささえる」は8.9%、「するのみ」は6.1%、「みるのみ」は14.5%、「ささえるのみ」は2.2%、「する」「ささえる」は32.7%、「する」「みる」は3.7%、「みる」「ささえる」は2.1%、「するのみ」は3.7%、「みるのみ」は16.7%、「ささえるのみ」は2.6%、「しない・みない・ささえない」は40.7%である。



【図C-1】「する」「みる」「ささえる」の関係(全体・性別)

注) する:週3回以上の運動・スポーツ実施者、みる:年1回以上、直接スタジアム等でスポーツを観戦した者、ささえる:年1回以上、スポーツ・ボランティアを実施した者

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015

る「ささえる」は4.9%と2つに参与する割合の合計22.0%にのぼる。これに対して「する」だけ15.6%、「みる」だけ18.0%、「ささえる」だけ2.4%と単一のスポーツ参与の合計は36.0%となり、まったくスポーツに関与しない36.7%とほぼ同じ数値となる。重複のスポーツ参与の割合3割弱、単一のスポーツ参与35%、関与なしの割合が35%に大別できよう。

図C-1中央に男子におけるスポーツ参与パターンを示した。「する」「みる」「ささえる」は7.2%、「する」「みる」は8.9%、「する」「ささえる」は2.4%、「みる」「ささえる」は6.1%と2つに参与する割合の合計17.4%にのぼる。これに対して「する」だけ14.5%、「みる」だけ16.0%、「ささえる」だけ2.2%と単一のスポーツ参与の合計は32.7%となり、まったくスポーツに関与しない割合は32.7%となる。

一方で女子の「する」「みる」「ささえる」は3.7%、「する」「みる」は10.5%、「する」「ささえる」は2.1%、「みる」「ささえる」は3.7%と2つに参与する割合の合計16.3%となる。これに対して「する」だけ16.7%、「みる」だけ20.0%、「ささえる」だけ2.6%と単一のスポーツ参与の合計は39.3%となり、まったくスポーツに関与しない割合は40.7%となる。

男女の違いは、①複数のスポーツ参与で男子の24.6%に対して女子では20.0%と男子が女子を4.6ポイント上回り、②単一のスポーツ参与では男子32.7%に対して女子39.3%と女子が男子を6.6ポイント上回り、③まったくスポーツに関与しない割合は男子32.7%に対して女子40.7%と女子が男子を8ポイント上回ると、女子の消極的な姿勢が認められる。

### C-3 学校期別にみる「する」「みる」「ささえる」の変化

図C-2は男子の学校期別の「する」「みる」「ささえる」のパターン割合を示した。「する」「みる」「ささえる」三位一体型の参与割合は小学校4.5%、中学校8.6%、高等学校10.2%と順次上昇するが、大学では2.9%と急激に下降する。「する」「みる」の割合が小学校38.2%と突出し、中学校18.6%、高等学校15.3%、大学7.8%と、「する」のみでも小学校28.7%、中学校15.0%、高等学校10.2%、大学4.9%と下降する。この下降傾向に対して、「みる」のみでは小学校7.6%、中学校14.6%、高等学校19.7%、大学24.5%、関与しない割合では小学校17.8%、中学校27.5%、高等学校33.9%、大学51.0%と上昇する。

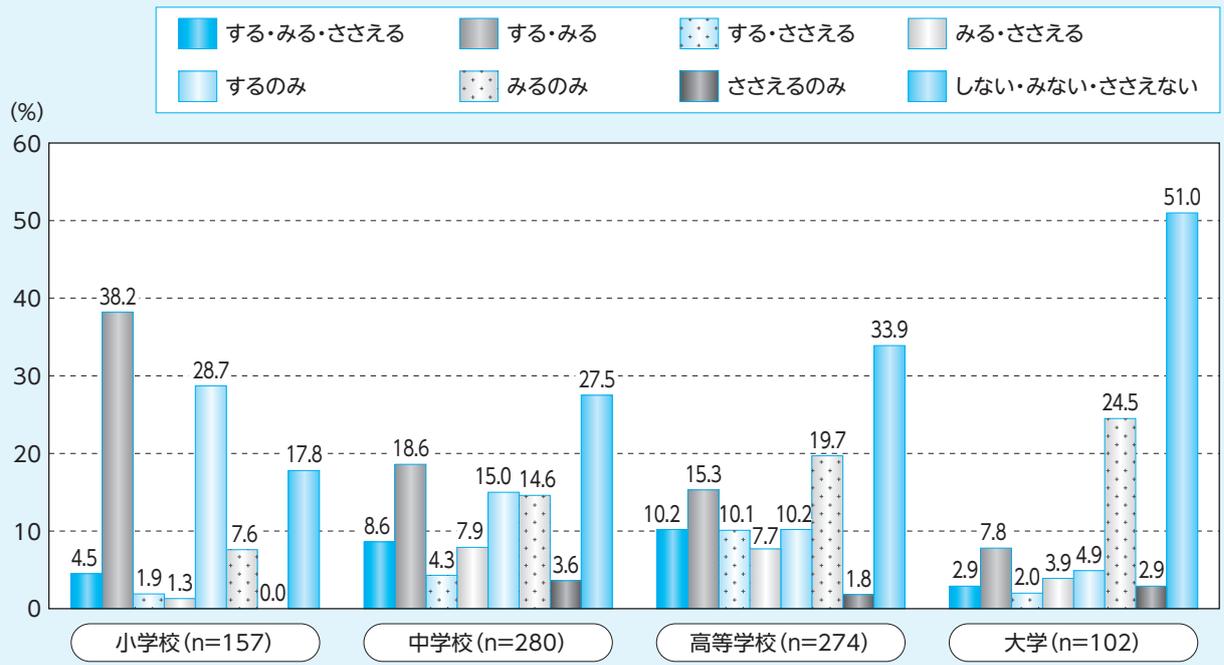
図C-3は女子の学校期別の「する」「みる」「ささえる」のパターン割合を示した。「する」「みる」「ささえる」三位一体型の参与割合は小学校2.0%、中学校4.7%、高等学校5.1%、大学2.1%にとどまる。「する」「みる」の割合では小学校17.0%、中学校15.0%、高等学校6.2%、大学5.7%とその参与割合で男子と顕著な違いが確認できる。さらに「する」のみでは小学校45.8%が

著しく突出した後、中学校17.1%、高等学校10.1%、大学2.9%と急激に下降する印象をもつ。関与しない割合では小学校23.5%、中学校41.5%、高等学校39.7%、大学48.6%と中学校以降は10人中4人がスポーツにまったく関与しない。

さて、スポーツ・キャリア形成に向けた社会的交換理論を援用するとき、複数の役割への参画が次第に選りすぐられて、もっとも嗜好に合ったそれが取捨選択されると仮定できる。同時に、自己のありさまを認識するためには他者性が必須となる。これを「する」「みる」「ささえる」という3つの人の重視に敷衍するならば、複数のスポーツ参与が結果的にいずれかのスポーツ参与を保証すると想定できる。したがって、単一のスポーツ参与には取捨選択の余地がないばかりか、他者性も確保できない。そのような結果、男女ともに何も関与しないパターンの割合が上昇したり、女子にみられる不参与パターンが固定したりする、生涯スポーツ実現とは逆行する事態が生じていると危惧される。

#### <参考文献>

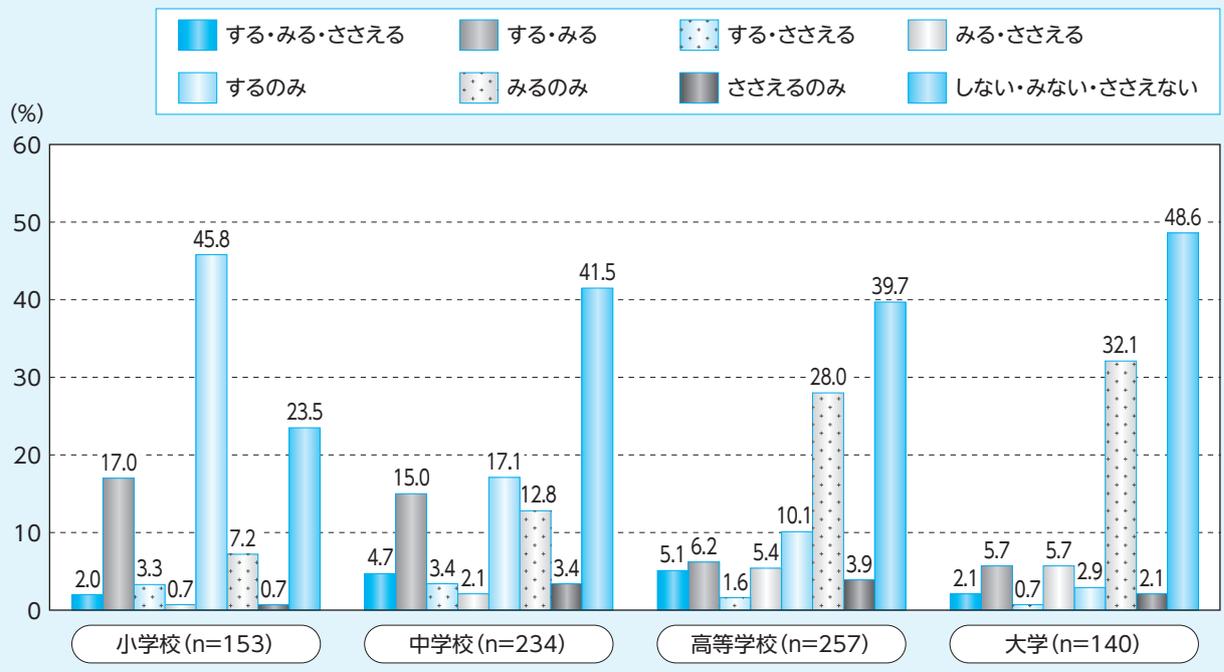
草野進：プロ野球批評宣言，新潮文庫，1988



【図C-2】「する」「みる」「ささえる」の関係(学校期別:男子)

注) する:週3回以上の運動・スポーツ実施者、みる:年1回以上、直接スタジアム等でスポーツを観戦した者、ささえる:年1回以上、スポーツ・ボランティアを実施した者

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015



【図C-3】「する」「みる」「ささえる」の関係(学校期別:女子)

注) する:週3回以上の運動・スポーツ実施者、みる:年1回以上、直接スタジアム等でスポーツを観戦した者、ささえる:年1回以上、スポーツ・ボランティアを実施した者

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015